

國學院大學學術情報リポジトリ

討議記録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井下, 千以子, 後藤, 美絵, 綾川, 浩史, 成田, 信子, 川原, 尚子, 薄井, 道正, 吉永, 安里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001328

〔シンポジウム討議記録〕

登壇者

井下千以子（桜美林大学リベラルアーツ学群教授）

後藤美絵（千葉商科大学付属高等学校教諭）

綾川浩史（國學院大學栃木高等学校教諭）

成田信子（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

川原尚子（國學院大學人間開発学部国語力アップ講座特別講師）

薄井道正（立命館大学教育開発推進機構教授）

司会

吉永安里（國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）

吉永 それでは、質疑に移ります。
どなたか御質問のある方がいらっ
しゃいましたら、どの先生にどの
ようなということで御質問をいた
だければと思います。



藤森裕治 今日はありがとうございます。縁がありまして初
めて参加させていただきました。信州大学の教育学部に勤めて
おります藤森裕治と申します。実は私、Eテレの「国語表現」
という番組の監修講師をしておりまして、初回ときにMCの
中江有里さんと、この番組はどういうコンセプトでいこうか
という話をした時のキーワードが「国語表現はコミュニケーション」
。これで四十回の「国語表現」をずっとやってきております。
伺いたいというよりも感想的なことを申し上げますので、もし

もこれでヒットされる先生がおられたらお考えを頂戴したいの
ですが、今日伺っていて主に「書く力」という点にある程度、
焦点化されている気がするのですが、高等学校の「国語表現」
という科目の中では、音声言語のコミュニケーションというも
のが非常に重要な位置を占めておりまして、書くことと、それ
から話すこと、聞くことが半々のウエイトで考えられているの
です。これを高大接続で考えた場合に、固より書くという行為
も幅広くコミュニケーション能力の一つであって、あらゆる言
語行為は社会的なコミュニケーション行為だと思っっているの
です。ただその場合に、生徒や学生の一人一人の思考力、それか
ら言語処理、表現力をつけるということもさることながら、そ
れに伴って、例えば薄井先生が先ほど「読み手意識」というこ
と仰いました。これは当然ながらコミュニケーションの中で生
じてくる読み手意識や目的意識である訳であって、そうすると、
うまく申し上げられませんが、コミュニケーション能力の育成
という視点から見た場合、どういうふうな立ち位置で、そのコ
ンテンツを考えていったら良いか。具体的には、例えばルーブ
リックを作成する際に、一人一人の論文構成能力をルーブリッ
ク化することは可能でしょうが、思いやりながら相手と話すだ
とか、相手の言葉に対して受容的に聞くとか、或いは責任を
取るといったような、こういった視点からコミュニケーション
能力という視点で国語力を考えた場合、どういう展望が必要に
なってくるのか、それについてお考えがあれば聞かせていた
だきたいと思いました。

薄井 いきなりなのでちょっと答えにくいですが、コミュニ

ケーション能力というふうに一言でまとめてしまっても、なかなか捉えどころがないというのが個人的な思いです。私は、学生に「コミュニケーション能力」をつけるとは言ったことがありません。コミュニケーション能力よりも、むしろ今大事なものは「合意形成能力」だと思っています。合意形成能力というのは、先ほどディベートの話も出ましたが、ディベートよりもむしろ重要なのではないか。考えの異なる者同士が、いかに着地点を見つけられるか。その力でもコミュニケーション能力だといふのであれば、そうだろうというふうに思っています。それをどういうふうに「見える化」するかというか、「スキル化」するかと言われると、まだ個人的にはできていないので、そういう実践があれば、ぜひ教えていただきたい。それにしても、コミュニケーション能力という言葉は厄介な言葉だと思っています。先ほど、「あーす」や「やばい」といった言葉だけで会話を終わらせてしまうという事例が紹介されました。教えていくべきは、言葉をちゃんと分節化していくということではないか。私は語彙力を増やすために、例えば「やばい」なら、「やばい」という言葉を使った場面を三つ以上挙げさせ、「やばい」のちがいが明らかにできる別の言葉を探させ、パラフレイズさせるということをやっています。たとえば、「昨日見た『君の名は。』という映画、やばいよね」という場合と、「昨日食べたあのチョコレートパフェ、やばいよね」という場合の「やばい」は違うよね。この「やばい」を別の言葉で言い換えたらどうなる？ つまり、一つの言葉で言い表してしまっているものについて、分節化をちゃんとさせる。相手に微妙なちがいがちゃんと伝わる言葉を選択したり、あるいは作ったりしていく、そのことに

よってコミュニケーションが成立するというのであれば、コミュニケーション能力も重要な力かもしれない。でも、一気にコミュニケーション能力が身につく方法なんてないように思います。ただ、まちがいはなく言えることは、コミュニケーションの基本は、発信ではなく、受信（聞くこと・訊くこと）だろうということです。自分にとって理解できないものを排除する、切り捨てるのではなくて、理解しようとするのだと思っています。それは内田樹さんも言っていますが、他者と向かい合う時の基本的な構えでもあります。相手が言っていることに対して、まずは「そうだね」と頷き、受け入れること。理解できないことでもまず受け入れる。そこからしかコミュニケーションは始まりません。まずは相手の思考や感情への思いやりと敬意を示す。他者とのコミュニケーションは、まずは「きく」というところからしか始まらない。

成田 藤森先生、ありがとうございます。私は、コミュニケーションという中の大事な要素として、違和感があるかどうか分かるとか、聞き取れるとか、言えるとか、そういうことを大事にしたいと思っています。先ほどの私の実践でもお話ししたのですが、みんなと話していると全然違うことが出てきて、そのことによって「耕される」という、そういうところは大事にしたいと思っていますし、書くことのために話しているというよりも、先生はシンキングと仰ったのですが、考え表すというのは話して表すこともある訳ですから、そういうものが感じ取れるということは大事だというふうに思っています。

綾川 今回のようなシンポジウムも、それぞれ役割があると思うのです。私が先ほどお話ししたコの字型でやっている事例の中でやっている一つの方法なのですが、四人で基本的に一つの班として役割を結構回すことによって、それぞれのコミュニケーションのやり方、例えば腕章を用意してその日のリーダーを決めておいて、そのリーダーとしての司会的な役割としてのコミュニケーション、全体の話を引き出すとか、またこれを文章化してちゃんと合っているのかを推敲して板書させる係ですとか、そのような役割を一つの教材なるべく回るようにしながらやる。腕章を付けていることで、リーダーなりキャプテンなり、結構自覚を持ってやるのです。その中で色々な役割としてのコミュニケーションが苦手な生徒も、周りがサポートしながらやるというようなやり方で私はやっております。以上です。

後藤 コミュニケーション能力を「国語表現」の授業の中でどれだけ醸成出来るかというところと思うのですが、本校においては「国語表現」の授業で行うディベートを通して、お互いに意見を突き合わせるという実践をしております。それがどれだけうまくいっているのかというのは何とも言えない部分もあるのですが、ただ先ほど薄井先生が仰ったように、生徒たちというのとはとにかく単語を追って会話をしています。これは、恐らくLINEや携帯などが普及し始めて、文章ではなく単語単語で会話をして、それだけで意思の疎通が終わってしまう、そのような現状があります。ですから、先ほどの「やばい」という言葉も非常によく聞きますし、何か腹の立つことがあると「うざい」で片付けてしまうなど、語彙力の少なさが、人間関係に

おいて誤解を招くことというのもあるかと思います。ですから、コミュニケーション力ということを考えて、語彙力や言葉の言い回しの大切さなど、学校内外の人間関係の中で、または授業を通して増やしていければ良いのではないかと思います。

吉永 ありがとうございます。では、もう一方、先ほど手を挙げて下さった方がいましたので、そちらの方、お願い致します。

豊島眞介 追手門学院大学の豊島といいます。私、基盤教育機構という所で今、「日本語表現」という科目を持っています。

来年は国際教養学部という所に国際日本語学科というのが出来るので、そちらに動くことになっていますが、もともと実務家教員で、新聞記者で書くことは随分やってきました。そして、実際問題として、書くだけではなくて編集という、記者だけではなくて編集者の方もやっておりました。その時に見出しを作るといところで、短い言葉を色々、特に五・七・五というのが日本語の一番基本的なリズムというのがよく分かります。そういう流れの中で、さっきの方が仰ったことなのですが、今回は、読む、書くという、そちらの方に話がかなり集中しているのですが、私は、聞く、話す、というそちらの方は一体どういうふうに皆さんお考えになっているのかということをお伺いしたいというふうに思っています。日本の英語教育がこれだけ低迷しているのも、そこら辺に原因があるのではないかというふうに思っているのですが、宜しくお願い致します。

吉永 ありがとうございます。では、こちらから順番に。



後藤 話すということは、生徒にとって、友達同士の内輪向けの話と、全体の前での話は、随分感覚が違うように感じます。「国語表現」の授業の中では、高校二年生の段階でスピーチをさせています。そのスピーチは、クラス全体に向けて行います。テーマとしては自分が興味を持っていることであるとか、最近楽しかったことであるとか、面白かった本であるとか、とにかく何を伝えたいかということを確認させて話すように指導しています。それに対して、「聞く」側には一人一枚のリアクションペーパーを渡しています。例えば出席番号一番の子が発表したとすると、その発表に対してクラス全員がリアクションペーパーを書くというわけです。その際に、例えば声の大きさであるとか、聞き取り易かったとか、前を向いてちゃんと喋っていたとか、あとは内容が面白かった、どういう点に興味があった、こういうことをもとと知れたかった、などをそれぞれリアクションペーパーを通して友達に伝えるところを取っています。「相手の発言を誤解せずに理解できる」こと、「聞いた内容に対して自分の意見を伝えられる」こと、これらが「聞く」「話す」で最も重要な点だと考えますが、これには双方ともに、相応の語彙力が必要だと感じます。授業を通して語彙力を増やしなから、スピーチや、調べ学習の発表を通して、まず二年生の段階で行い、「人前で話す」ことへのアレルギーを無くす、また「意識して聞く」ことを本校では実践しております。

綾川 私は、今回の発表とちよつとずれるかもしれませんが、特に三年生を対象に新聞記事を用いた授業を多く行っている

ます。新聞記事の内容は自由、ただし、スポーツ欄については基本的には取り上げないということを決めています。その新聞記事の要約をして、かつそれに対する自分の感想を書き、一切原稿を見ないで全員の前で発表させる機会を全員に対して設けています。全員が各生徒の発表を聴き、コメントを書いた上で、評価を点数化し、順位を決めています。このように、話す、聞くという機会をなるべく多くつくるようにしています。部活のミーティングにおいて、戦術をしつかり確認したつもりでも、いざ試合をやってみると理解していなかったのだなと後で気付くことが多くあります。会話内容をちゃんと理解しているかどうかを、書くことで確認する作業が大切だと実感しています。

成田 御質問ありがとうございます。大学生のカリキュラムの中に、話す、聞く、或いはコミュニケーションをどうやって入れているかというふうに思いました。それはシステムとして。ただ、先年度まとめた、例えば演習でどういう力が働いているかというようなところでは、質問して考えを深める、相手と討論して論点を見出し考えを構築するというような、今、要素として抜き出しているところなので、それを例えばカリキュラムとしてどう育てていくか、課題をいただいたと思います。

川原 どうもありがとうございます。私も、聞く、話す力をつけるというのは非常に重要だと思っています。自分の息子が大学院生で、娘が大学生で、今年、二人とも就職活動を行いました。

その中で聞く、話す力が無いと、いくら文章を上手に書いたところで、面接の時に非常に困るということを改めて感じました。そして今まで自分がちよつと抜け落ちていた部分だと思っています。ただ、一つのテーマについて書く場合に、賛成の立場を取るのか、反対の立場を取るのかということを、その講座の中で学生にはつきりさせて、まず一人ずつ話してもらったりとか、ある人の考えに対して自分がどのように思うのかを言ってもらったりとか、そういうことはなるべく行うようにしております。先ほどもありましたコミュニケーション能力についてなのですが、全員に対して自分一人で話す場合と一対一で話す場合と二つあると思うのです。一対一の場合ですと、学生の中でまず話し合つて、考えをまとめて発表するという機会を設けています。全員に対して自分一人で話す場合には、どのようにテーマについて考えたかを言つて、みんなから質問を受けて話すことを取り入れています。あと、私もなるべく学生と関わつて話をして、会話を楽しむようにしています。そういう何気ないことからコミュニケーション能力というのは少しずつ作られていくのかなと思っています。聞く、話す力をつけることは今後の課題として、是非取り組んでいきたいと思っています。

薄井 つい最近、「高校生は友達と話す機会が多い人ほど語彙の熟知度が高い」というベネッセの調査結果が出ているので、アウトプットする、「話す」というのが、語彙力というものを高めていく手段としても有効なことは確かなようです。その点では、「話す」というのも非常に重要なのであろうとは思っています。ただ、読む・書く・話す・聞く、これらは全部同列な

のだろうかという疑問が、ずっと私の中にあります。もともと私は、読み方指導が専門だったこともあり、ベースは「読み」だという思いが強くなります。つまり、「読む」ということができなかつたら、書けないし、話せない。私たちの指導できることが限られている中で、その資源をどこに投入するのかという話かもしれません。先ほどライティング授業での学生の振り返りコメントの一部を紹介しましたが、この授業で身についた力の一番目に「読む力」を挙げている学生が何人もいました。ライティングの授業なのに「読み」の力がついたと答えているのです。学生に訊いてみると、読めなければ書けないと学生自身が気づくようです。他の先生からもよく聞くのですが、授業の中で討論させると活発に発言する学生が必ず何人かはいる。でも、活発に発言はするのだが、討論自体は深まっていけない。グループの中で、その学生たちは良く喋るのだが、その学生たちが喋っただけで討論が終ってしまう。討論の指導がまずいといえどもそれまでなのですが。もう一つ、「話す」で気になっているのは、どうしても学生はストックフレーズで話を済ませてしまうのです。手持ちの語彙だけで話をする。さらに気になるのは、質問をしないことです。もし「話す」というトレーニングをするのであれば、大事なことは話すことより訊くこと、質問することではないかと思っています。今、私が学生に教えているのは、探究的な対話のために大事なことは質問することだということ。コミュニケーションという話が出ましたが、コミュニケーションの基本は何かといったら、繰り返しになります。コミュニケーションの基本的な問いは、分岐点に訪れること、前のめりになって相手に訊いていくこと、これしかないと思います。

だから私は、授業の中で、とにかく質問を考えるところをつくっていています。さきほど絵の話をしました。最近読んで凄く面白かったのが、早川書房から出た『観察力を磨く名画読解』という本です。絵画を使って「知覚の技法」を修得し、洞察力や伝達力、判断力を身につけていくことを説いているのですが、その「知覚の技法」の第一に、対象をしっかりと見ること、観察すること、そして問いをぶつけながら情報を引き出してくることを挙げています。やはり、「きく（聞く・訊く）」ことが優先順位でいえば最初にくるだろうと思っています。

吉永 ありがとうございます。時間になってしまったので、最後に井下先生から総括のお話をいただければと思います。

井下 先生方の貴重なお話を伺い、私は本当に総括などという立場ではないのですが、今の話から話の流れでお話をさせていただきます。私には今、タイトルに「考えて書く力」ということで、自分の研究の流れと実践の流れからライティングと思考力というところに焦点を当ててお話をしましたが、実は応用的な研究に看護記録の研究というのがございます。看護大学の先生からの「考えられるナースを育てたい、そのために看護記録をしっかりと付けたい」という要望をもとに、看護師の方々にグループインタビューを行い、現場に貢献するための研究を長年続けて参りました。今も慶應義塾大学大学院の健康マネジメント研究科で非常勤で教えておりまして、看護師の方だけではなくて医療関係の方々と一緒に実践を高めるためにはどうしたら良いのかというように研究を続けてい

ます。その中で思うことは、聞く、つまり患者さんから聞く力が無い、患者さんに話し掛けて質問をして聞き出す力がないと良い記録は書けない。つまり、良い記録の前に、良い看護実践、看護行為がなければ記録は書けないということなのです。医師と看護記録の大きな違いというのは、医師は病態を見ているのですが、看護師の方は患者の全体像を見えています。従って、医師は病院に行って何をするかというところ、ナースステーションに行ってまず看護記録を読むのです。それによって患者の様子がわかります。看護師の方は、「看護」という漢字を見てもわかるように、「手」という字に「目」ということで、つまり話すだけではなくて、手を当てて「どうですか」と患者に語りかけ、それで昨日と今日でどう病態が変わったかということを見分けていって、それによって自分が何をしたらかという判断と患者の事実。患者の事実も、患者の客観的な事実と患者が述べた主観的な事実を書き分けなければならないということがあって、そういうことは実は看護の現場だけではなく、社会生活全般においてもあることだと思うのです。つまり、看護の現場においても「書く」ということの中に患者との意思疎通、コミュニケーションというものがうまく出来る人でなければ、話すことも、聞くことも、書くことも出来ないのだと思います。「読むこと」に関しましては、コミュニケーションというのは実は発達心理学の中で、私たちが生まれてどうやって言葉という力をつけていくのかという話を、実は昨日の「発達心理学」の「言葉の発達」の中でも学生たちに話したのです。まず、生まれて間もない赤ちゃんは音を聞きます。赤ちゃんはお母さんに話さないと言われなくても、「ああ」とか「まあ」とかという音を自ら

発します。それをお母さんが受け取って、「まあ」と言ったら、「まあね」とか、「まんまあね」とかというところから始まってきます。子どもが自分の今度意思を主張するようになると、指さし行動ということが始まります。例えばこういうペンを自分の手で掴みたいといったら、こう指して「あーあーあーあー」というふうに言ったら、お母さんが「これね」というふうにやって渡すと、自分はこれが受け取りたいのだということがわかるようになり、だんだんにそういうことから、例えば虫ということをお母さんに伝えたいと思うと、子供は飛んでいるものを指さします。そうすると、蝶々とかトンボとか、他に飛んでいるものは鳥とかもあるので、同じ概念を「同化」して学びます。ところが、虫の中でも飛ばないものもあって、アリは飛ばない。「アリさんは飛ばないよね」ということになる、では虫というのは何なのかということになり、虫には足が六本あって体が



三つに分かれていてという非常に難しい説明になるのですが、子供はそういう難しいことを、事実を見ながら自分の中で概念を作り上げていくのです。同じものと違うものを区別して「調節」しながら様々な概念を子供は覚えていきます。そうすると、その概念というものが結局は、私たちが何でこういう難しいことを思考出来るようになったかというところ、「書き言葉」という抽象的な操作が出来るように、書き言葉を使って目に見えないものも抽象的に操作出来るので、私たち人間は思考力が非常に発達していったのだと考えられます。というようなことで、私たちは言葉というものの発生ということから、どのように発生していったか、発達していくのかということを考えても、聞く、話す、読む、書くという四つの力というのはそれぞれに相互に関係しながら育っていくものだと思います。皆様から貴重なお話を聞かせていただき、現場で奮闘しておられる先生方の話をお聞きして大変勉強にさせていただきました。またフロアからも貴重なご意見をいただき、とても刺激的な会となりました。改めてお礼を申し上げさせていただきます。ありがとうございます。

吉永 井下先生、それから御登壇の先生方、四時間半の長時間に互って充実した御発表をいただきまして、本当にありがとうございます。それから、フロアの先生方からも、たくさんの質問をいただき質疑も盛り上がりまして、本当にありがとうございます。これで終わりにしたいと思います。

